

# 第3章 メンフィス・ネクロポリスの保存整備計画の方向性

吉村 作治\*<sup>1</sup>、河合 望\*<sup>2</sup>

## 1. はじめに

2007年度に採択された日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究（S））「エジプト、メンフィス・ネクロポリスの文化財保存面から見た遺跡整備計画の学際的研究（課題番号:19100010、研究代表者:吉村作治）」は、メンフィス・ネクロポリスの遺跡群の保存管理計画を策定することを目的とし、年ごとに数回エジプト現地に調査隊を派遣し、メンフィス・ネクロポリスにおける遺跡整備・保存修復の調査研究が実施された。本研究では、「遺跡の重要性の理解」、「将来に及ぼす影響」、「方針の策定」という3つの行程を経て、メンフィス・ネクロポリスの遺跡整備計画の策定を目指すことを目的としているが、本稿では、メンフィス・ネクロポリスにおけるエジプトと諸外国による遺跡の保存整備の動向と遺跡環境の現状を踏まえ、メンフィス・ネクロポリスの保存整備計画の方向性の概要を提示することを目的とする。

## 2. メンフィス・ネクロポリスにおける遺跡整備の動向

本研究を申請した2000年代は、エジプトにおける観光客が著しく増加し、観光開発も飛躍的に拡大した。このような傾向は20世紀の末に大観光時代を迎えて、世界各国の世界遺産などの文化遺産の重要な問題となった。これを受けて文化遺産の保存修復、整備、管理は世界の文化財行政において極めて重要な課題となったのである。エジプトも例外ではなく、2000年3月にエジプト、カイロで開催された第8回国際エジプト学会議では「遺跡の管理と保存」の討論セッションが設けられ、これ以降エジプト考古学において「遺跡管理」が非常に重要な課題として認識されている。

メンフィス・ネクロポリスにおいていち早く遺跡管理が推進されたのは3大ピラミッドで有名なギザ遺跡であり、元エジプト考古省国務大臣のザヒ・ハウス博士が「ギザ台地保存管理計画」を提案した。これはエジプトの遺跡における初の遺跡保存管理計画である。この計画は、第1期から第4期までの工程で構成されているが、1988年に第1期が実行に移され、現在は第4期が進行中である。サッカラでは、2000年にイタリア隊が、“Enhancement of the Organization and Capabilities to Preserve the Cultural Heritage of Egypt”と冠してサッカラの遺跡管理計画に資するリスクマップを提示することを目的とするプロジェクトが立ち上げた。このプロジェクトの成果を受けて、新たに Institutional support to SCA for environmental monitoring and management of cultural heritage sites: applications to Fayoum oasis and North Saqqara Necropolis と題したプロジェクトが2004年からの計画で発表された。

さらに、エジプト革命直後の2011年5月にはフランス政府開発庁(AFD)が、“Enhancing the Value of Saqqara Archaeological Site”と冠する遺跡管理計画と遺跡管理計画に必要な職業訓練を目的とするプロジェクトを開始した。遺跡管理計画では、①概念的な遺跡管理計画、②観光訪問者のための導線計画、③一般公開遺跡20カ所の新しい説明板の設置が含まれ、職業訓練ではエジプト考古省の管理職および査察官にたいする遺跡の維持管理の訓練を目的としている。

---

\*1 早稲田大学国際学術院名誉教授

\*2 早稲田大学高等研究所准教授

ダハシュールでは、2007年にエジプト政府文化省考古最高評議会（現エジプト政府考古省）、エジプト政府外務省と国連開発計画（United Nations Development Programme）、世界観光機関（World Tourism Organization）、国際労働機関（International Labour Organization）、国連教育科学文化機関（UNESCO）などの協力でダハシュールの文化遺産と自然環境を保護し、地域経済の発展も含めた保存整備開発プロジェクトが開始され、スペイン政府、国連開発計画によるスペイン・ミレニアム開発目標基金（Millennium Development Goals Fund）を通じての資金援助を受けていた。このプロジェクトでは、ダハシュールの遺跡の保存整備を行い、これまでに未公開であった遺跡を観光客に一般公開することを主な目的としているが、利害関係者でもある地域社会における文化財を活用した開発が盛り込まれていることが特徴である。エジプトにおいて稀有な自然環境を維持しながら、遺跡を公開して観光事業を進め、地域経済の活性化を目論んだプロジェクトと言える。しかし、このプロジェクトはムバラク体制崩壊後には継続されておらず、後述するように革命後のダハシュール遺跡は、一部の住民による盗掘活動や現代墓地の拡大などで危機的な状況に瀕している。

最後に、現在ギザ遺跡の北方で建設されている大エジプト博物館（Grand Egyptian Museum）は、日本国政府の有償資金協力（円借款）の供与を受けており、これに付属する大エジプト博物館保存修復センター（Grand Egyptian Museum Conservation Center）が完成し、国際協力機構（Japan International Cooperation Agency）が専門家を派遣し、博物館に展示する所蔵品の保存修復技術や収蔵品管理のためのデータベースを支援するプロジェクトが進行中である。大エジプト博物館保存修復センターの完成は、遺跡管理計画に必要とされる「設備のある保存修復研究施設」を満たすものであり、博物館の建設は、同じく遺跡保存管理計画に必要とされる「考古学的情報と観光客および地域住民のための施設を備えた社会教育施設」の充足させるものとして期待される。

### 3. 遺跡の現状の概要

これまでの現地調査における踏査および人工衛星画像解析からメンフィス・ネクロポリスの各遺跡に一貫した保存整備が講じられていないことは明白である。次章で各遺跡の現状と遺跡整備の方向性の提言を示すが、遺跡によって管理の現状にばらつきがあり、抜本的な改善が求められる。すでに青木、矢澤が前章で指摘したように、メンフィス・ネクロポリスでは、概して遺跡と居住地、工業地などの世俗地区とのゾーニングが明確ではない。唯一ゾーニングが明確になっているのは、ギザ台地の3大ピラミッドのある観光地区であり、2008年頃からようやくサッカー遺跡の東側の耕地際で遺跡と居住地を隔離する保護壁が設けられるようになった。しかし、こうした保護壁、保護柵の設置は極めて例外である。

2011年1月のエジプト革命以降は、遺跡での盗掘被害が増大し、現代の墓地が古代の遺跡を侵食する事態も起きている。ただし、それ以前においても遺跡での盗掘、産業廃棄物の投棄、居住地や産業地区の拡大、現代墓地の拡大、採掘活動などの問題が顕在化していた。また、遺跡エリアには軍事施設が多く、メンフィス・ネクロポリスでもアブ・ロアシュ、ザヴィエト・アル＝アルヤーン、ダハシュールなどに軍事施設があり、軍事施設内に遺跡がある場合も少なくない。このような問題は、現地エジプト政府の問題であり、法的根拠づけを至急に行い、ゾーニングコントロールを導入しなければならない。メンフィスとそのネクロポリスは、1979年にユネスコの世界文化遺産として登録された文化遺産であり、ユネスコからもエジプト政府に対して勧告することも必要であろう。

本研究を申請した2006年頃のエジプトは、国際観光客の数が800万人を超え、前述のような問題以外に観光客の増加や観光開発等による遺跡環境の悪化が懸念され、遺跡の保存整備計画の重要な課題となっていた（高梨2011）。しかし、ムバラク政権崩壊後のエジプトの遺跡は、治安の悪化等の理由で観光客が激減し、現地住民の一部による盗掘の被害、墓地やモスクの建設などの問題が最優先課題となっている。このように、メンフィ

ス・ネクロポリスを含めたエジプトの遺跡の現状は、本研究の開始時に指摘した観光客の増加、開発等による遺跡破壊などによる遺跡劣化という問題というよりも、革命後の混乱などによる治安の悪化や現政権の無関心などで、盗掘という人為的な遺跡破壊が増加し、危機的な状況にあるといっても過言ではない。一方で、ギザ遺跡やサッカー遺跡といった主要な遺跡では、革命以前にザヒ・ハワス博士によって策定された保存管理計画に従い、革命後の混乱でやや停滞したものの、整備が継続されている。例えば、ギザ遺跡ではクフ王のピラミッドの北西の進入路の途中にチケット・オフィスが建設され、現在ギザを観光する全ての観光客の入口となっている。また、ピラミッドの周囲にはロープが張られ、観光客の侵入に対する保護策が講じられている。サッカーでは、ウナス王のピラミッドの参道の南に位置する新王国時代の墓地のホルエムヘブ墓、マヤ墓、ティア墓などの重要な高官の墓やセラベウム一般公開された。最近一般公開された遺跡は、適切な保存修復や管理が講じられている。また、ジェセル王の階段ピラミッドではピラミッドの表層石と内部の保存修復作業が継続されている。しかし、こうした主要な遺跡群の局地的な保存整備以外は、メンフィス・ネクロポリス全体を通じた遺跡の保存整備は今後の課題である。

次章で詳細に取り上げられるように、世界文化遺産に登録されているにもかかわらず、ギザ遺跡やサッカー遺跡の一部以外のメンフィスとそのネクロポリスの各遺跡では、ゾーニングコントロールや保存整備あるいは管理に関する事業はほとんど実施されておらず、遺跡の発掘調査権を持つ各調査隊の保存整備の方針に委ねられている。つまり、各国の調査隊の保存哲学で修復整備が行われているのが実情である。実際のところ、財政難が理由でエジプト政府が文化財の保存管理に特別な予算を計上することはほとんどなく、先にも述べたようにほとんど外国からの援助で保存管理を実施しているのが現実である。第4章では、早稲田大学エジプト学研究所が調査を継続している2つの遺跡での具体的な保存整備計画案を提示するが、以下ではこれまでの研究の成果を踏まえたメンフィス・ネクロポリス全体の保存整備の方向性を示したい。

#### 4. メンフィス・ネクロポリス遺跡保存整備計画の方向性

現在エジプトは革命以降の混乱から遺跡の保全は危機的な状況にあり、保存整備計画案を提示する以前に、ユネスコなどの国際機関や各国の関係機関の援助により第一に遺跡破壊からの保全を維持することが喫緊の課題である。また、治安の悪化により見学者の安全の確保が困難になっている状態であるので、警察などの適切な配置、護衛も優先課題であろう。しかし、将来エジプト社会が安定化すれば、再び多くの見学者や観光客がメンフィスとそのネクロポリスの多くの遺跡に訪れてくることが予想される。したがって、盗掘や墓地などの現代施設の開発などによる遺跡の人的被害だけでなく、以前から指摘されていたような見学者や観光客による人的被害も想定されよう。また、各遺跡の歴史的・文化的価値や文化景観としての価値などを理解させるためのさまざまな試みが必要である。これらは、遺跡や見学者、観光客だけを対象とするものではなく他の利害関係者、たとえば現地の住民や地域社会の発展に貢献するものでなければならない。つまり、遺跡景観や文化的景観の保全と地域経済の活性化を両立する必要がある。

##### (1) 対象とする地域

本来であれば、メンフィスとそのネクロポリス全ての遺跡を対象に次章で指摘されているような保存整備案を実行に移す必要があるが、まず未公開の遺跡に関しては既に指摘されているような遺跡とそれ以外の地域を分けるゾーニングコントロールの確立が急務であると考えられる。したがって、まず保存整備の対象となる遺跡はすでに公開されているギザ、サッカー、ダハシュール、メンフィスに絞るのが現実的であろう。

## (2) 課題

まず、これらの地域で遺跡の保存に不可欠な保存修復工事、管理に必要な整備、観光客に必要な整備が望まれる。

### ①観光ルートとエントランス施設

観光ルートに関しては、全章で指摘されているように、駐車場を遺跡の中ではなく外に設置する必要がある。比較的遺跡整備が進んでいるギザ遺跡に関しても、団体のマイクロバス、大型バスはカフラー王のピラミッドの北東の空き地を駐車場として利用している状況が続いている。サッカラ、ダハシュールでは遺跡のある砂漠の台地への進入を禁止し、緑地の砂漠側の縁辺部に新たに駐車場を設け、そこから古代のピラミッドの参道を通して遺跡にアクセスするのが望ましい。たとえば、サッカラでは現在イムヘテブ博物館の前にある駐車場を東側に拡張し、隣接してエントランス施設を設けることを提案する。同じように、ダハシュール地区も砂漠の入る入口の前に駐車場とエントランス施設を設け、そこから王家の谷のように電気自動車等で従来の進入路を用いて各遺構にアクセスすることを提案する。現在、野外博物館を中心として構成されるメンフィスの観光施設にも新しいエントランス施設が必要であろう。

エントランス施設は、チケット売り場だけでなく、遺跡全体の管理業務を統括する事務所、日常維持管理のための要因の事務所、観光警察詰所、守衛詰所、遺跡ガイド詰所などから構成される。また、エントランス施設内には、遺跡の重要性の情報を提供する資料展示・映像展示施設、見学のエチケットのためのガイダンス施設なども設置する。

### ②バザール、書店、食堂

エントランス施設、駐車場の付近には地域経済の活性化のために見学者、観光客向けのバザールを設ける。これらのバザールでは地域住民が製作した伝統工芸、古代の遺物の模造品などのお土産を販売する。書店では見学する遺跡に関連した一般向けの書籍やガイドブックなどを販売する。食堂は地域の伝統食を中心にしたレストランを置く。

### ③見学コース

メンフィス・ネクロポリスの遺跡には古代エジプト王朝時代約3000年間の様々な遺跡があり、サッカラのような重層的な遺跡については見学者や観光客の理解が難しいと思われる。エントランス施設において時代別、テーマ別などの見学コースを複数設定し、見学者や観光客に選択させるのが望ましい。また砂漠を歩行するのは困難が伴うため、木製の板を渡した見学路を設置し、遺跡に直接手を触れることのないような工夫をすることも望ましい。

### ④遺跡情報の表示

メンフィス・ネクロポリスにおける遺跡の情報表示は全体的に少ないことが指摘されているが、遺跡の景観を損ねる恐れがあるので、必要最低限の数でステンレスなどの劣化しにくい材料で設置するのが望ましい。本報告集の附録2にあるようにスマートフォンなどのモバイル・デバイスを駆使した新しい遺跡情報の表示方法が今後の新しい時代の望ましい遺跡情報の表示方法であると考えられる。

### ⑤野外博物館の設置

これまでエジプトの多くの遺跡で野外博物館が設置されているが、多くの場合は大型の出土遺物を覆う箱物であったり、美術的な価値の高い遺物を陳列するような施設であったりする 경우가少なくない。現在のメンフィスの野外博物館やサッカラのイムヘテプ博物館もそのような施設の例である。今後の野外博物館のあり方としては、通常遺跡と行き別れとなってしまう遺物をヴァーチャル・リアリティで本来のコンテキストで理解し、遺跡の歴史的背景や価値等を容易に理解できるように展示するのが望ましい。また、遺物の劣化が著しい場合は、3Dスキャナーによる複製を展示し、実際の遺跡で復元することも提案したい。野外博物館は、また見学者や観光客のみを対象とするだけでなく、現代のエジプト人が自らの過去を理解する野外学習の場として活用されることも期待される。

### ⑥ソフト面での協力（人的支援）

エジプト革命以降の社会の混乱はエジプトの収入源である遺跡観光の観光客の数を激減させ、現地の経済に大きなダメージを与えている。このことの反動で、観光客の増加を焦るあまり過剰な開発が進むことが懸念される。メンフィス・ネクロポリスを含めたエジプトの遺跡の整備計画は、現地の経済の発展とともに持続的かつ適切に文化遺産を保存修復し、維持管理、そして活用するバランスが求められる。これまでエジプトの遺跡における保存整備は、海外が主導となって外国からの援助金で推進されてきたが、保存整備計画のコンセプトと実践を現地の文化財行政の担当者だけでなく利害関係者である地域住民や業界関係者に啓蒙する機会を提供することが極めて重要であると考え。すなわち、文化遺産におけるハードの保存整備のみならずソフトの面についても継続的に機会を提供しつづけ、自立した遺跡の保存整備を確立することが急務であると考え。

## 5. まとめにかえて

以上、メンフィス・ネクロポリスの保存整備計画の方向性についての概要を示した。本章では、メンフィス・ネクロポリスの全ての遺跡に普遍的な課題であるゾーニングコントロールを提言し、保存整備計画については優先順位として既に公開されている遺跡で実践されるべきであることを示した。ギザ遺跡は、他のメンフィス・ネクロポリスの遺跡に比べて保存整備が進展しているが、既に大観光地として一般公開されているサッカラ遺跡やダハシュール遺跡は、観光ルート、駐車場、エントランス施設、見学路、遺跡情報の表示、あたらしいコンセプトの野外博物館の設置などより抜本的に遺跡整備を進めていく必要がある。また、遺跡における施設や見学路といったハードの設備だけでなく、エジプトが自立して文化遺産の保存管理を持続することができるように文化財行政の担当者のみならず現地住民、業界関係者など全ての利害関係者に遺跡の重要性と価値を正しく評価できるような教育の重要性を指摘した。本稿は、メンフィス・ネクロポリスの全体を対象とした大局的な保存整備の方向性を示したに過ぎないが、各遺跡での具体的な現状と遺跡整備の提言は次章に譲り、第4章では早稲田大学が発掘調査を継続してきたアブ・シール南丘陵遺跡とダハシュール北遺跡におけるより具体的な保存整備計画案を示す。これらの保存整備計画案は、エジプト政府考古省に提言として提出し、現在ますますその重要性が認識されているエジプトの文化財の保存整備に寄与していきたい。